

変貌する思い出の町「幕張」まくはり

エッセイスト 近藤 節夫（知研会員）

「幕張町」はわたしにとって、京都や湘南・鵜沼と並んで、多感な少年期を過ごした「ふるさと」のひとつである。かつてはどこか垢抜けなかった町・幕張が、いまやテクノビルが林立する洒落た「近代シティー」としてドラスティックに変貌を遂げたとは知ったのは、それほど昔のことではない。

戦後間もない昭和二四年、小学五年生の秋、都会的でもなく、さりとして田舎くさくもなく、何となくくすんだ感じの「幕張町」に、父の転勤で同じ千葉県内の南房総・勝山町（現 鋸南町）から家族七人で移ってきた。農業と漁業以外にこれといって変哲もない勝山町で過ごしていたわたしは、引越越してすぐ社宅前を走る緑色の京成電車に目を吸い寄せられ、自宅から毎日電車が見られることが大きな楽しみとなった。通学路もところどころ電車軌道内を歩いて通い、電車が近づいてくると身をよけるという風に、電車が一陣の風を伴って通過するときには、警笛が鳴らされるのを楽しんでいたものである。時には電車がスピードを落として車掌が窓から顔を出し、「コラッ！ 危ない！ ここを歩いちゃダメだ！」と怒鳴られたことも一度や二度ではなかった。

そのころスポーツ界では、「フジヤマのトビウオ」古橋選手が活躍し、また湯川秀樹博士が日本人として初めてノーベル賞を受賞され、暗かった戦後にも漸くほのかな光が差し込んできた。少年のわたしの周辺には、とりたてて大騒ぎするような事件やニュースもなく、平々凡々の中で元気で腕白な少年時代を送っていた。

他愛ないことだが、その当時は大都会である東京に少しでも近づいたというだけで、何か娯楽に満たされた、わくわくする期待感が漠然としてあったものである。東京に一步近づくとが楽しみでもあった。時折ともに野球を楽しんだ作家椎名誠の兄研二らと誘い合わせ、後樂園球場へプロ野球を観戦に行った。

遠浅の幕張海岸は潮干狩りで知られ、休みになると東京方面から人びとがどっとやってきた。町の中にはアサリや、はまぐり、天日干しされた浅草のりの磯の香りが漂っていた。町の中を国鉄総武線と京成電車、そして県道が東西に平行して走り、その交通の利便性のおかげで、何もかも不便なあんな時代でも、いち早く東京の新鮮な香りとファッションが流れ込んできた。町の一部の地域は不思議に洒落た雰囲気醸し出す一方で、サツマイモの産地として、でんぷん工場から洩れてくる異臭と魚介類の匂いが渾然一体となって、どこか独特の空気を匂わせていた。

わたしが転入した木造建ての幕張小学校は、昆陽神社（甘藷先生と言われた青木昆陽を祀った社）の裏手にあった。わたしは師範学校を出たばかりの若く情熱的な男性教師、湯浅和先生のクラスに編入された。先生は子どもたちにも陰で愛称「ポンチ」と呼ばれていて、誰からも慕われていた。ポンチは授業ばかりでなく、社会性のある話題についても分かりやすく話してくれた。新聞紙上を賑わせていた朝鮮戦争や三鷹事件などについても子

どもにも分りやすく聞かせてくれた。時折フィルムドワークとして生徒を郊外へ連れ出しでは、野外で自由に遊ばせてくれた。とりわけ版画や絵画、工作を教えることにも熱心で、祖父から多少絵描きの血筋を受け継いだわたしは、ことのほか先生に可愛がられ、以来昭和五十九年先生が亡くなるまで毎年のように版画年賀状を交換していた。先生は校外のお花畑や神社で田畑を駆け回るわたしたちに温かい視線を送りながら、俳句も教えてくれた。拙い俳句ではあったが、一度だけ少年雑誌に応募して入選した、少年期の自慢のグラフィティがある。先生はお花畑の雰囲気と情景がよく表われていると言って、わたしが入選した俳句を褒めてくれた。

”コスモスが ゆれて見つかる かくれんぼ”

これは版画年賀状とともに、亡くなったポンチとわたしの絆の証である。

戦後の貧しい時代に、東京人から見下されたようなこの小さな町で、自然とともに蘇生する時代の空気の中で、大勢の土地っ子と喧嘩したり遊んだり、また、近所の大人たちから、時には怒られたり助けられたりしながら、素朴でやんちゃな心を育くんでもらった。僅か三年間の幕張暮らしではあったが、いまにして想い出される懐かしさと、ひとり湧いてくる感謝の気持ちに強い郷愁を憶えるのもむべなるかなと思う。

中学生になって、わたしは再び父の転勤により、楽しく遊び回った思い出を胸いっぱい詰めて、この幕張を離れることになった。わたしたちがこの町を去ってから、戦後の動乱景気と歩調を合わせるように遠浅海岸は埋め立てられ、近くには大きな工場がいくつも建てられた。

いまから二十年ほど前久しぶりに幕張へ行ってみた。すっかり町は変わり、昔の面影はほとんど見られなくなった。夏になると毎日のように海水浴をしながらアサリを採ったり、少年野球大会のために暗くなるまで練習に明け暮れた浜辺はいまはもうない。昔の幕張町は千葉市に編入されて、京葉工業地帯の重要な拠点として日本経済復興の一翼を担っていたのである。その後千葉市は政令指定都市となり首都圏メガロポリス都市として発展した。臨海鉄道も敷設され、近くには近年プロ球団のグラウンドも作られ、周囲の様相は一変した。幕張はいまや国際会議場や展示場を抱える「幕張メッセ」として、世界に知られる国際会議都市へ一気に駆け上がっていったのである。

あれから幕張を訪れるたびに町はまた変貌し、わたしたちが面食らった異臭漂う一角のほど近い辺りには、大きなテクノビルが軒を連ね、それが町に冷たい無機質の色合いを深めている。古い住宅が密集する地域は相変わらず狭く色褪せて、一方でそれとは対照的に、少し離れたビル街には近代的な高層建築が立ち並び、そのコントラストは町の繁栄とギャップを象徴的に映し出している。

駅頭に立つと、つい甘酸っぱいセンチな気分と、いくばくかの寂寞感に襲われる。住む人も変わり、町はよそ者の町となった。遊びまわった友も、いまではほとんど「ふるさと・幕張」を離れた。町の発展というのは人々に恩恵を与える一方で、住む人が入れ替わり町から情緒や潤いを奪い去り、伝統と思いが消え、面白みのない無味乾燥な場所に変えてしまうものだ。

時の流れとは言え、夢中になって海岸から狭い路地を遊びまわった、懐かしいセピア色の「幕張町」は、もう永遠に手の届かないところに行ってしまった。